

## 看護基礎教育における災害ボランティアの教育効果

柏 葉 英 美<sup>1</sup>・奥 寺 三 枝 子<sup>2</sup>

### Effectiveness of Disaster Volunteer Training as Part of Basic Nursing Education

KASHIWABA Hidemi OKUDERA Mieko

A 看護師養成所では、東日本大震災の被災地である県北沿岸部の野田村に災害ボランティアを実施した。看護師養成所という専門性を活かしたボランティアをすることは、被災者支援という災害ボランティアの機会を、一つの効果的な災害看護教育となり得るのではないかと考えた。災害ボランティア終了後の学生の学びについてアンケートを内容分析した結果、【不安と緊張】【戸惑い】【スキルの活用】【カタルシス】【現場からの学び】【被災者に対する学生の思い】【心のケア】【ボランティアの意義】【生きる力】【自己効力感】の10のカテゴリーが導出された。学生は被災者支援について具体的な方法まで考え記述していた。それは学生が災害看護を履修済みであることに加え、実習での経験を積み重ねたことにより看護師の視点で災害ボランティアに臨んでいた結果と考える。

キーワード：看護基礎教育、災害ボランティア、教育効果、生活者

Located on the northern coast of Iwate Prefecture, the Village of Noda was struck by the Great East Japan Earthquake, and Nursing School A provided disaster volunteers to the village. Serving as a disaster volunteer (i.e. disaster relief) and drawing on one's expertise (i.e. having attended nursing school) can serve as an effective form of disaster nursing training. Students were surveyed regarding their insights after they served as disaster volunteers, and their responses were subjected to content analysis. That analysis identified 10 categories: Anxiety and stress, Confusion, Use of one's skills, Catharsis, Insights from firsthand experience, Thoughts about disaster victims, Mental care, The value of volunteering, The strength to keep on living, and Self-efficacy. Students described specific ways they provided disaster relief. Their responses signaled that students had completed disaster nursing. They also indicated that students had, through their experience gained in actual practice, served as disaster volunteers from a nursing perspective.

Keywords: basic nursing education, disaster volunteer, effectiveness of training, resident

### I. はじめに

2011年3月11日に発生したマグニチュード9.0を記録する東日本大震災は各地に甚大な被害をもたらした。特に、沿岸部においては津波によって町は壊滅状態となり、震災被害をさらに拡大させた。岩手県北内陸部に位置する看護師養成所では大きな被害はなく、学生・職員ともに全員無事であり、通常通りに授業を開

始することができた。この未曾有の大震災を経験し、教員だけではなく学生からも、何か力になりたい、早く被災地の支援に行きたいという声が多く聞かれた。

そこで、A 看護師養成所では、県北沿岸部の被災地である野田村に災害ボランティア（以下、ボランティアとする）に入ることを模索した。しかし、被災地に何の準備もなく、支援したいという思いだけで学生を連れて行くことは、被災者に迷惑をかけることになる

1 岩手県立大学社会福祉学部

2 岩手県立二戸高等看護学院

だけではなく、学生の安全も守れない可能性があった。また、看護師養成所という特性を活かせるボランティアをすることは、被災者への支援というボランティアの機会を一つの効果的な災害看護教育となり得るのではないかと考えた。そこで、4月に岩手県地方振興局を通して学生のボランティアの申し込みを行い、久慈保健所の保健師と野田村の保健師とともにボランティアの内容について検討した。また、学生のボランティアに先立ち、教員全員が5月と6月に県の保健師とともに避難所をまわり、被災した方々の健康チェックおよびハンドマッサージを行いながら傾聴し被災者のニーズの把握を行い、学生のボランティアにつなげていった。ボランティアを行うにあたり、A看護師養成所としては単発で行うのではなく、継続してボランティアを実施したいと考え、全学年を数回にわたり派遣する方法で、毎年継続して実施する方針を掲げた。

学生のボランティア実施に向けて慎重に計画を立て第1回目は発災3ヵ月後（6月）に2年生、第2回目は発災4ヵ月後（7月）に3年生、第3回目は発災9ヵ月後（12月）に1年生がボランティアを実施した。そこで、第1報では発災3ヵ月後（6月）に2年生が行ったボランティアの教育効果について報告した（柏葉・奥寺・清水・玉川・安木・横濱・沢口, 2011）。

今回、最終学年である3年生がボランティアを経験したことによる教育効果について報告する。

## II. 研究目的

本研究の目的は、最終学年である看護学生のボランティア体験の学びを明らかにし、看護基礎教育における教育効果について検討することである。

なお、被災した野田村の人口は4632人（2010年）で、世帯数1578戸（2010年）、主要産業は漁業であり、被災状況は、基幹産業である水産業は、ほとんどの港湾・漁業や、沿岸付近の加工工場、漁協事務所、栽培漁業施設などが被災し、多くの漁船、漁具が流出した。また、街の中心部が被災し、家屋等倒壊数479棟で、商店街や診療所、保健センター、保育所、図書館、消防屯所などが全壊し役場庁舎も床上浸水した。避難箇所8ヵ所、避難者数298名、死者38名、行方不明者はなかった（岩手県政策地域部調査統計, 2012）。

## 1. ボランティア活動における配慮

ボランティアを行う時期が、発災4ヶ月後であり、被災現場が生々しい状況で残っていることから、学生への配慮が必要であり、オリエンテーションが重要であると考えた。新美・堀井（2004）は大規模災害訓練における負傷体験の研究において注意しておくべき点として「非日常的で恐怖を伴う体験は学生にとって激烈な感情体験であり、感情賦活を伴う出来事の記憶により鮮明に保たれ『恐怖条件づけ』、『感作』、『記憶の消去の失敗』を機序とする外傷後ストレス障害（PTSD）に学生が陥る危険性である」と述べている。そこで、学生に対してボランティアへの参加は強制ではなく学生自身の選択によるものであり、不参加であっても不利益を受けないことを保証し、ボランティア途中または終了後に不具合があった場合は、すぐに申し出てもらい、精神的ケアを行うことを説明した上で、以下の内容についてオリエンテーションを行った。

- (1) 東日本大震災の地震および津波の概要
- (2) 被災地の概要
- (3) 被災状況および復興状況
- (4) 保健活動状況
- (5) 災害支援の心構え
  - ① 災害時の援助者としての態度
  - ② 接し方のポイント
  - ③ 災害による子どものストレスへの対応

## 2. ボランティアの内容

3年生が訪問した時期は、災害サイクルが亜急性期から復旧復興期（黒田・酒井, 2013）への移行の時期であり、6月に応急仮設住宅（以下、仮設住宅）230戸が完成し1ヶ月が経過し新しい生活環境に適応して行く時期であった。そこで、被災者の健康な生活への支援として心と体の健康管理を目的にボランティアを行った。ボランティアの内容は、午前中は野田村にある3箇所の保育所で園児を対象とした手洗いについての健康教育の実施、園児との遊び、保育士へのハンドマッサージを行った。また、午後からは仮設住宅を個別に訪問し、仮設集会所で健康チェックや癒しと傾聴を目的としたハンドマッサージとフットマッサージ、合唱を行った。仮設住宅でのボランティアは仮設集会場での実施のため、仮設住宅1軒1軒にお知らせして歩き、住民の方々に集まってもらった。さらに、お知らせをしながら、歩行困難やひきこもりの方に対しては、

学生と教員がペアになり個別訪問をして血圧測定やハンドマッサージを行った。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 研究対象

A看護師養成所（3年課程）の学生で、2011年7月にボランティアを行った同意を得られた3年生の学生35名（男子1名、女子34名）。

#### 2. 調査期間：2011年7月～2011年12月

#### 3. 学生のレディネス

学生は、災害看護を2年次に「看護の統合と実践」（15時間1単位）で履修済みであった。また実習は、看護学別実習7クール目で、保育所実習は全員終了し、在宅看護論実習もほとんどの学生が経験していた。学生のスキルとして、ハンドマッサージやフットマッサージは、癒しだけではなくコミュニケーションツールとしての看護技術を習得し、そのスキルを実習で活用しており、すぐに使える技術であった。また、園児への健康教育は学生が保育所実習において実習課題として実施しているものを行った。

#### 4. データ収集方法

無記名自記式質問紙法。ボランティア実施後に被災地での経験で感じたことや学びなどについて自由に記載してもらった。

#### 5. 分析方法

調査で得られたデータを基にkrippendorffの内容分析(Klaus,1980 三上他訳1989)に準拠し分析した。自由記載の中から学生がボランティアでの体験について述べている箇所を1意味単位で抽出し、文脈的背景を考慮しつつコード化した。抽出したコードをもとに、意味内容の類似性と差異性に従い集合体を形成し、サブカテゴリーとし、その後抽出したサブカテゴリーを基に同様の手法を用いカテゴリーとした。なお、分析過程においては研究者間で検討を重ね信頼性・妥当性を確保した。

#### 6. 倫理的配慮

学生に協力依頼時、調査の趣旨を説明した。協力は

任意であり、参加・不参加による不利益が生じることはなく、質問紙は無記名とし、成績とは無関係であることを口頭と文書で説明した。また、個人情報の保護とデータの取り扱いと管理、学会発表すること、研究終了後に質問紙は適切に処理することを説明し、質問紙への記入をもって同意とした。なお本研究は岩手県立二戸高等看護学院の倫理委員会において承認を得て行った。

### Ⅳ. 結果

本研究において【】カテゴリー、『』はサブカテゴリー、<>は意味内容を表わすコードとした。学生の学びや気づきを表わす素データ163から、133のコード、34のサブカテゴリー、10のカテゴリーが導出された。10のカテゴリーは【不安と緊張】【戸惑い】【スキルの活用】【カタルシス】【現場からの学び】【被災者に対する学生の想い】【心のケア】【ボランティアの意義】【生きる力】【自己効力感】であった。（表1）

以下、各カテゴリーの内容で特徴的な部分を詳述した。

1. 【不安と緊張】のサブカテゴリーは『ボランティアに対する緊張と不安』『家庭訪問することへの躊躇』であった。『ボランティアに対する緊張と不安』とは、<ボランティアに行く前の学生の緊張><被災者とのかわりに緊張感を抱く学生><被災現場を見て募る被災者との関わり方への不安>など3個のコードで構成され、『家庭訪問することへの躊躇』とは<仮設住宅を訪問することへの躊躇>のコードであった。

2. 【戸惑い】のサブカテゴリーは『学生の戸惑い』『関わり方の難しさ』であり、『学生の戸惑い』とは、<引きこもっている被災者に対する戸惑い><被災者にどこまで聞いて良いのかという戸惑い>のコードであった。『関わり方の難しさ』とは<気持ちを上手く表現できない子どもへの関わり方><仮設住宅に引きこもりがちの被災者とのコミュニケーション>のコードであった。

3. 【スキルの活用】のサブカテゴリーは『授業の学びを活かした支援』『心を癒した合唱』『ハンドマッサージ効果』であった。『授業の学びを活かした支援』とは、<災害サイクルにあった支援><マッサージを通して被災者に寄り添うことで看護を実感><実習での学びを活かした健康チェックやハンドマッサージ>など4個のコードであり、『心を癒した合唱』とは、

＜歌は人の心を穏やかにするアイテム＞＜気持ちを前向きにしてくれる合唱＞のコードであった。『ハンドマッサージ効果』とは、＜安心感や癒しを与えてくれるスキル＞＜自然にできた会話＞＜マッサージ効果で得られた笑顔と会話＞など5個のコードであった。

4. 【カタルシス】のサブカテゴリーは『カタルシスの効果』『傾聴の大切さ』であった。『カタルシスの効果』とは＜話すことで得られた被災者の満足感＞＜表情の変化で感じたカタルシスの効果＞など4個のコードであった。『傾聴の大切さ』とは、＜話を聞いてほしいという被災者の思い＞＜話を聴くだけでも力になるという学び＞＜傾聴と共感の大切さの実感＞など5個のコードであった。

5. 【現場からの学び】のサブカテゴリーは『現地を見ることでわかる被災の現状』『被災者に必要な援助』『仮設住宅での生活』『災害の恐ろしさ』『震災による心身への影響』『長期支援の必要性』『被災者を支える人への支援』であった。『現地を見ることでわかる被災の現状』とは、＜テレビからは伝わらない現場の状況＞＜被災による生活環境の変化＞など7個のコードであった。『被災者に必要な援助』とは＜話を聞いてほしいという被災者のニーズ＞＜現地を見ることでわかった必要な援助＞など7個のコードであった。『仮設住宅での生活』とは、＜仮設住宅での生活の実態＞＜仮設住宅は最低限の生活保障＞＜日常生活の問題点の把握＞など4個のコードであった。『災害の恐ろしさ』とは＜被災地を見て受けた衝撃＞など3個のコードで、『震災による心身への影響』とは＜敏感になっている被災者の心＞など3個のコードであった。『長期支援の必要性』とは、＜子どもたちを支えられるような長期的支援の必要性＞など2個のコードであり、『被災者を支える人への支援』とは＜被災者を支えている保健師や看護師への支援の必要性＞＜保育士の疲れを癒す対策の必要性＞など3個のコードであった。

6. 【被災者に対する学生の想い】のサブカテゴリーは『ボランティアへの心残り』『被災者への思い』『感謝の気持ち』『現状を知ることで落ち込む気持ち』であった。『ボランティアへの心残り』とは、＜もっと欲しかった子どもと関わる時間＞など3個のコードであった。『被災者への思い』とは、＜テレビでは伝わらない現状や生の声に心打たれる学生＞＜元気になってほしいという願い＞など8個のコードであり、『感謝の気持ち』とは、＜ボランティアを受け入れてくれた被災者

への感謝の気持ち＞のコードであった。『現状を知ることで落ち込む気持ち』とは、＜マッサージしながら聞いた被災状況に悲しい気持ちになる学生＞＜被災現場を見ることで落ち込んだ気持ち＞など3個のコードであった。

7. 【心のケア】のサブカテゴリーは『被災者への心のケア』『園児の様子』『被災者の疲労』『被災者のつらさと悲しみ』であった。『被災者への心のケア』とは、＜被災者との関わりから学んだ心のケア＞＜園児たちの心の課題＞＜町の復興だけではなく精神面への長期的ケアの必要性＞など8個のコードであった。『園児の様子』とは、＜大人から離れようとしめない園児の存在＞など4個のコードであった。『被災者の疲労』とは、＜仮設住宅入居者同士の気遣いによる疲労＞など3個のコードであった。『被災者のつらさと悲しみ』とは、＜悲惨な被災現場から感じる被災者のつらさ＞＜言葉になくても伝わってきたつらさや悲しみ＞など7個のコードであった。

8. 【ボランティアの意義】のサブカテゴリーは『ボランティアの継続』『連携の大切さ』『支援することの大切さ』であった。『ボランティアの継続』とは＜自分達が出来たことを継続していくことが復興への支援＞など3個のコードであり、『連携の大切さ』とは、＜民生委員との連携の大切さ＞のコードで構成されていた。『支援することの大切さ』とは、＜被災地に出向くことの大切さを実感＞＜ハンドマッサージに涙する被災者＞など6個のコードであった。

9. 【生きる力】のサブカテゴリーは『被災者の前向きな姿』『恩返し』であった。『被災者の前向きな姿』とは、＜つらく悲しい体験をしてもなお力強く生きる被災者＞など4個のコードであり、『恩返し』とは、＜恩返しをしたいと考えている被災者の思い＞のコードで構成されていた。

10. 【自己効力感】のサブカテゴリーは『嬉しかった被災者からのことば』『学生の自己効力感の向上』『今後の看護に活かせる学び』『園児からもらった元気』『貴重な体験』であった。『嬉しかった被災者からのことば』とは、＜嬉しかった園児からの「またきてね」の言葉＞など4個のコードであった。『学生の自己効力感の向上』とは、＜学生でも支援できたことへの充実感＞＜被災者のがんばっている姿からもらった元気＞＜被災者のあたたかい対応への驚きとうれしき＞など11個のコードであった。『今後の看護に活かせる学

び』とは、＜ボランティアでの経験は今後の看護への学び＞など2個のコードであった。『園児からももらった元気』とは、＜園児たちの笑顔に感じる嬉しさ＞など4個のものであった。『貴重な体験』とは、＜病院実習では

体験できない貴重な体験＞など3個のコードであった。また、カテゴリーを構成するコードの割合は【現場からの学び】【自己効力感】【心のケア】の順で多く14～19%を占めていた。

表1 災害ボランティアでの学生の学びと気づき(1)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	素データ数
不安と緊張	ボランティアに対する緊張と不安	ボランティアに行く前の学生の緊張 被災者とのかかわりに緊張感を抱く学生 被災現場を見て暮る被災者とのかかわり方への不安	8 (4.9%)
	家庭訪問することへの躊躇 学生の戸惑い	仮設住宅を訪問することへの躊躇 引きこもっている被災者に対する戸惑い 被災者にどこまで聞いて良いのかという戸惑い	4 (2.5%)
戸惑い	関わり方の難しさ	気持ちを上手く表現できない子どもへの関わり方 仮設住宅に引きこもりがちの被災者とのコミュニケーション	
	授業の学びを活かした支援	災害サイクルにあった支援 マッサージを通して被災者に寄り添うことで看護を実感 実習での学びを活かした健康チェックやハンドマッサージ コミュニケーションスキルを活かした触れ合い	
スキルの活用	心を癒した合唱	歌は人の心を穏やかにするアイテム 気持ちを前向きにしてくれる合唱	12 (7.4%)
	ハンドマッサージ効果	安心感や癒しを与えてくれるスキル 自然にできた会話 マッサージ効果で得られた笑顔と会話 ハンドマッサージしながら直接開けた被災者の生の声 コミュニケーションスキルとしてのハンドマッサージ効果	
カタルシス	カタルシスの効果	話すことで得られた被災者の満足感 表情の変化で感じたカタルシスの効果 それぞれの思いを表現してくれた被災者 津波や不安などたくさん話してくれた被災者	16 (9.8%)
	傾聴の大切さ	話を聴いてほしいという被災者の思い 話を聴くだけでも力になるという学び 傾聴と共感の大切さの実感 受容と傾聴を心がけた学生 被災者の思いに対する傾聴・受容・共感の実践	
現場からの学び	現地を見ることでわかる被災の現状	テレビでは伝わらない現場の状況 被災による生活環境の変化 現地を見ることで分かった被災の現状 被災現場を見ることで震災の怖さを実感 映像とは違う現場の雰囲気 被災地を訪問することで理解できた現実 被災地を見ることで得られた気づきと学び	
	被災者に必要な援助	話を聞いて欲しいという被災者のニーズ 現地を見ることで分かった必要な援助 引きこもっている被災者へのかかわりの工夫 自ら被災時の状況を話してくれる方の存在 経済的支援など様々な支援の必要性 保育士の思いを吐き出す場所の必要性 仮設住宅での生活に対する不満への援助の必要性	
現場からの学び	仮設住宅での生活	仮設住宅の環境に慣れない入居者の思い 仮設住宅での生活の実態 日常生活の問題点の把握 仮設住宅は最低限の生活確保	31 (19%)
	災害の恐ろしさ	被災地を見て受けた衝撃 津波の恐ろしさを実感 津波現場に立つことへの恐怖	
被災者に対する学生の思い	震災による心身への影響	敏感になっている被災者の心 避難所生活で凝った肩 震災による身体への影響の実感	
	長期支援の必要性	子どもたちへの長期支援の必要性 継続した支援の必要性	
被災者に対する学生の思い	被災者を支える人への支援	被災者を支えている保健師や看護師への支援の必要性 保育士の疲れを癒す対策の必要性 保育園を立て直すための保育士の苦労を実感	
	ボランティアへの心残り	もっと欲しかった子どもとかかわる時間 保育士へのケアができなかったことへの心残り ボランティアでやり残したことへの心残り	
被災者に対する学生の思い	被災者への思い	テレビでは伝わらない現状や生の声に心打たれる学生 元氣になって欲しいという被災者への思い 瓦礫の山を見て思う被災者の心境 被災した園児の元氣な姿を複雑な思いで見える学生 園児の「仮設に住んでいるの」の言葉に秘められた思いを感じる学生 被災者の心情を考える学生 被災者に安らぎを感じてもらえるように接した学生 印象に残ったマッサージを嬉しそうに受けている被災者の姿	17 (10.4%)
	感謝の気持ち	ボランティアを受け入れてくれた被災者への感謝の気持ち マッサージしながら聞いた被災状況に悲しい気持ちになる学生 被災現場を見ることで落ち込んだ気持ち 被災者の状況を想像すると何も言えなくなってしまった学生	

表1 災害ボランティアでの学生の学びと気づき(2)

	被災者への心のケア	被災者との関わりから学んだ心のケア 園児たちの心の課題 町の復興だけではなく精神面への長期的ケアの必要性 心のケアの大切さを実感 保育士への心のケアへの必要性 継続した心のケアの必要性 被災し4ヶ月経っても癒えない心の傷を知る 幼い子どもへの長期的な心のケアの必要性	24 (14.7%)
心のケア	園児の様子	大人から離れようとする園児の存在 園児の笑顔が少ないと感じた学生 園児の心を癒す接し方 喧嘩せず遊ぶ園児の様子	
	被災者の疲労	仮設住宅入居者同士の気遣いによる疲労 被災者の疲れを感じた学生 被災者の疲れとストレスを感じた学生	
	被災者のつらさと悲しみ	悲惨な現場から感じる被災者のつらさ 言葉になくても伝わってきたつらさや悲しみ 実際に瓦礫の山を見ることで感じた震災の恐ろしさと被災者の苦しみ 明るく振舞う被災者のつらい気持ちを感じる学生 保育士の明るい振る舞いからも感じる疲れとつらさ 本当はあるべき家が無いことへの悲しみ 悲しさと悔しさを受け止め始めている被災者	
ボランティアの意義	ボランティアの継続	自分たちができることを継続していくことが復興への支援 ボランティアを継続して行くことの大切を知る 再びボランティアを行いたいという思い	
	連携の大切さ 支援することの大切さ	民生委員との連携の大切さ 被災地に向かうことの大切さを実感 ハンドマッサージに涙する被災者 助け合うことのすばらしさを実感 一人でいると思ってしまう津波の恐怖 被災者支援は特別なことではなくて普段のことを普通にすること ボランティアを行うことの意義を実感	13 (8%)
生きる力	被災者の前向きな姿	つらく悲しい体験をしてもなお力強く生きる被災者 マッサージすることで笑顔になる被災者 被災者の明るい表情 被災者の前向きに生きようとする姿	8 (4.9%)
	恩返し 嬉しかった被災者からのことば	恩返しをしたと考えている被災者の思い 嬉しかった園児からの『またきてね』の言葉 マッサージへの感謝の言葉が嬉しかった学生 被災者の学生に対する対応に感動 学生ができることで被災者に喜んでもらったことへのやりがい	
自己効力感	学生の自己効力感の向上	学生でも支援できたことへの充実感 被災者の頑張っている姿からもらった元氣 被災者のあたたかい対応への驚きとうれしさ 集会所に来てくれた被災者の笑顔や対応に感動する学生 被災者の笑顔が学生の「楽しい」気持ちを刺激 学生の歌やダンスに喜ぶ被災者の姿に感じる喜び 被災者との関わりに満足する学生	30 (18.4%)
	今後の看護に活かせる学び	ボランティアの経験は今後の看護への学び 自分の目で見て感じた経験は今後役に立つ学び	
	園児からもらった元氣	園児たちの笑顔に感じる嬉しさ 明るく素直な元氣な子どもとの遊びを楽しんだ学生 被災現場を見て落ち込んだ気持ちは園児の元氣な姿で回復 園児の元氣な姿に癒された学生	
	貴重な体験	病院実習では体験できない貴重な体験 ボランティアで得た多くの学び 被災者から話を聴けたことは貴重な体験	

## V. 考察

学生が訪問した時期は、被災者が避難所から仮設住宅に移って1ヶ月が経過し、新たな生活が始まったばかりであり、災害から復興していくのに必要となる健康な生活への支援から精神面にいたる支援への視点が、求められる時期であった(黒田・酒井, 2013)。

学生はメディアを通じて被災地の現状を見ることで「学生である自分達に何ができるのか」「被災者は学生を受け入れてくれるのか」「迷惑ではないか」という思いを抱き「緊張した」と述べており、被災地でのボランティアに対する【不安と緊張】を感じ被災地に向かっている様相があった。これは、被害があまりにも大き過ぎたことで、自分たちが学んだ災害看護を被災地でどのように活かすことができるのかイメージできなかったのではないかと考えられる。しかし、訪問した仮設住宅は6月に2年生がボランティアを実施したところであり2度目の訪問であったことから、住民の方々の受け入れが良かったことが学生の【不安と緊張】を和らげてくれた。また、学生は、「仮設住宅を戸別訪問した際の引きこもりがちな被災者への対応」や、「被災者に対して、どこまで話を聞いて良いのか」など、初めて経験することへの対応に【戸惑い】を感じながらボランティアに臨んでいる様相があった。しかし、学生は【戸惑い】ながらも、コミュニケーションスキルとして習得しているハンドマッサージや血圧測定、臨地実習で培った技術など、学生の持っている【スキルの活用】により、被災者へ癒しの提供ができ、自然に被災者の話を傾聴することができていた。この時期は、被災者が避難所から仮設住宅へ移り、生活環境が変化した時期であり、ストレスが大きくなっており、また、被災者が自分の経験を語り始めている時期であった。被災者はハンドマッサージを受けながら、「夜眠れない」「寝るところがあるだけでありがたい。でも本音を言うと、やっぱりいろいろ不便だよ。落ち着かないし、やっぱり自分の家が良いよ。もう、流されて無いけど」等、自分の思いを学生に語っていた。被災者が語る被災時の状況や仮設住宅での生活などについて学生が傾聴することで、被災者の【カタルシス】が促され、その結果、被災者の表情が和らいでいくのを学生は感じていた。そして、学生は被災者の表情の変化から傾聴することの大切さを学び取っていた。災害看護は日常的な実践からの広がりであり、被災者固有の

身体的・社会的・感情的・精神的なニーズへの対応が必要である。学生が授業で学んだことや実習で実施していること、日常生活のボランティアで実施していることがそのまま、被災者支援につながっていることを学生は実感できたと考える。松村・松浦(2002)は、「直接的経験は対象の理解と看護方法の理解、看護師としての情意領域の育成に関与する」と述べている。実際に被災地を見て、被災者から話を聞くことで、学生は「メディアから得る情報よりも、自分の目で見て感じた経験は、看護の様々な場面に役立てることができると」感じていた。学生は、直接的経験によって【現場からの学び】を得て、被災者にとって今必要な支援とは何かを「考え」たり「感じ」たりすることができていた。また、学生は、被災者が「生活して行くためのお金の問題」「仮設住宅での近所との関係」など生活者としての問題を挙げていた。さらに、被災者の心の問題として「4ヶ月たった今でも心の傷は消えることはなく、また地震や津波がくるのではないかと不安を持っていた」「仮設住宅にいて孤独感を感じていた」「家に引きこもりがちだった」など、被災者の【心のケア】の必要性について多く記述していた。尾山(2010)は、「高齢者は日常よりも強く、災害によって喪失感や罪悪感を持っている」とし、心のケアの必要性を述べている。また、酒井(2006)は「生活者として被災者に対してどのような看護が必要か、災害看護の課題は何かを具体的にどうイメージできるかで、学習の質は変わってくる」と述べている。今回、学生は被災者支援として、被災者自身の自立した生活を妨げることのないように、住民の生活力を高めるような配慮や、継続的な支援ができるような対策の必要性を感じ、被災者支援について具体的な方法まで考え記述していた。また、学生は、被災現場を直接見て、話を聴くことで気持ちが落ち込む部分もあった。しかし、学生は、「つらいけど頑張るしかない、過ぎ去ったことを振り返っても悲しいだけ、前を向こうと私は思っている」や「家はなくなったが頑張って生きなきゃ」など被災しつらい状況であっても前向きに生きていこうとする被災者の発言から【生きる力】を感じ、被災者の笑顔に励まされていた。さらに、学生ボランティアに対する被災者からの感謝の言葉や被災者の笑顔は学生の【自己効力感】の向上につながっていた。学生は、今回のボランティアでできなかったことの分析、受け入れてもらったことへの感謝の気持ち、被災者支援と

して必要なことについて【被災者に対する学生の想い】を記述していた。そしてその学生の想いは、今後の看護活動に活かすことができる体験であったことが示唆される内容であった。それは学生が災害看護を履修済みであることに加え、実習での経験を積み重ねたことにより、生活援助を行うための観察とアセスメントを行い、必要な支援に結びつけるという看護師の視点でボランティアに臨んでいたからではないかと考える。また、学生が自分の目で事実を確認することで災害支援のあり方や自分の使命、これから学ぶべきことを考えることができていた(梅澤・宮越,2012)からであると考えられる。学生は、ボランティアを実施する前は、「自分たちに何ができるのだろう」と【不安と緊張】を抱いていた。しかし、ボランティアを経験したことで、「ボランティアは行って終わりではなく、実施して感じたことを次の支援に活かして行くことが大切」や「他職種の人たちと連携することで、被災者への支援は充実する」「自分たちのボランティアに涙を流して喜んでくれた」など【ボランティアの意義】について述べていた。

被災地でのボランティアは被災者への負担をかけないことが基本であり、被災地の現状を考えず支援しても、相手の迷惑になる場合もある。そこで教員は、被災者の負担にならないよう、自らボランティアを経験し、学生ができることについて地域の現状を踏まえて地元の保健師と協議を重ね、ボランティアにつなげた。野田村には保育所が3箇所あり、津波に流されてしまった保育所もあった。しかし、保育士の適切な判断で園児を避難させ、犠牲者はひとりも出なかった。教員は保育園を事前訪問し、保育士が疲弊していることがわかり、保育士への支援の必要性を感じた。そこで、3年生はすでに保育所実習を経験していることから、学生が園児と遊んでいる間に、保育士へハンドマッサージをすることで、癒しの提供が出来るのではないかと考えた。学生は保育士のハンドマッサージをしながら「子どものことが優先されてしまうが、保育士さんも大変な思いをして今日まで来ているので、今かかえている思いを吐き出させる場が必要」や「保育士さんは、明るく振舞っているものの、ふとした瞬間に見せる表情がつかうので疲れを感じた」など保育士への支援の必要性を感じていた。また、園児との交流では「園児と遊びを通してふれあって行くと、少しずつ笑顔が見られた。震災によって傷ついた子どもの心を癒

すためには、遊びで体を動かすことでストレスを発散させたり、大人から離れない子どもには、子どもの気持ちに添って抱っこするなどスキンシップをとり安心感を与えていくことが大切」や「今はまだ、幼くて現状をしっかりと認識できない子どもでも10年後、20年後に何かしら影響が出るのではないか」など、子どもの心について考えていた。また、仮設住宅でのボランティアに関しては、仮設住宅入居に伴う、問題が表面化しはじめていた時期であったことから、“癒し”と“健康”に着目した内容とした。学生からは「実習の学びを活かし、相手と同じ目線に立ち、相手の思いを傾聴し受容しながら血圧測定やハンドマッサージができた」や「災害ボランティアの取り組みはとても勉強になった。私たちは被災者の方から多くのことを学ばせていただいた」などの意見があり、学生の学びを深めることができたと考えられる。

## VI. 結論

1. ボランティアによる学生の学びや気づきとして【不安と緊張】【戸惑い】【スキルの活用】【カタルシス】【現場からの学び】【被災者に対する学生の想い】【心のケア】【ボランティアの意義】【生きる力】【自己効力感】の категорияが導出された。
2. 学生は被災者を生活者としての視点でとらえることができていた。
3. 学生は、災害看護を既習済みであることに加え、実習での経験を積み重ねたことにより看護師の視点でボランティアができた。
4. ボランティアは被災者への負担をかけないことが基本であり、被災地の現状を考え支援することが大切である。そのため事前にニーズの把握をしてボランティアに臨むことで学生の学びを深めることができた。

## 文献

- 岩手県政策地域部調査統計課 2012 平成23年度版  
岩手県統計年鑑 528 - 530
- 柏葉英美・奥寺三枝子・清水里香子・玉川美和・安木順子・横濱幸恵・沢口知亜紀 2011 看護基礎教育における災害ボランティア体験の効果 - 参加した学生のアンケートより - 看護教育 52(10)  
852 - 855

- Klaus Krippendorff 1980 CONTENT ANALYSIS  
: An Introduction to Its Methodology by Klaus  
Krippendorff. 三上俊治・椎野信雄・橋本良明  
(監訳) 1989 メッセージ分析の技法—「内容分析  
への招待—
- 黒田裕子・酒井明子 2013 ナーシンググラフィカ看  
護の統合と実践③ 災害看護 25 - 32
- 松村三千子・松浦妙子 2002 成人看護学授業におけ  
る疑似体験学習の重要性—片麻痺患者体験と対象  
理解の関係— 看護教育 42 (2) 132.
- 尾山とし子・谷岸悦子・山本捷子・岩田みどり・三澤  
寿美・今井家子・小原真理子・久保恭子・酒井明  
子・及川裕子 2010 災害看護基礎教育における  
被災者の特性をふまえた教授内容の検討 日本災  
害看護学雑誌 12 (2) 51 - 66
- 酒井明子 2006 災害看護を学ぶ視点 看護教育 47  
(3) 221 - 227
- 新美綾子・堀井直子 2004 大規模災害訓練の看護基  
礎教育における活用の検討—負傷者役として参加  
した看護学生の体験から— 日本看護医療学会雑  
誌 6 (2) 23 - 32
- 梅澤志穂・宮越幸代 2012 東日本大震災後の被災者  
支援ボランティア活動報告—避難所での看護支援  
に活かした国際ボランティアの原則と今後の課題  
長野県立看護大学紀要 113 - 122